

# 高等女学校で育まれる「外見の美」と「内面の美」： 園芸教育からの一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小出, 治都子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4509">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4509</a>

# 高等女学校で育まれる「外見の美」と「内面の美」 —園芸教育からの一考察—

学芸学部 化粧ファッション学科 小出 治都子

## 【研究目的】

園芸教育はフリードリヒ・フレーベルのガーデニング教育の導入によって行われるようになった教育である。日本においては、江戸期に本草学や園芸文化などがあつたものの、教育として取り入れられたのは明治期のこととなる。高等女学校の中では、明治 36 年に日本女子大学校、明治 42 年に奈良女子高等師範学校などで園芸教育に関する講義が講じられた。だが、園芸教育は定着せず、高等女学校においても段々とならなくなっていく。

樟蔭高等女学校においても園芸教育は行われていない。しかしながら、樟蔭高等女学校では創立当時に植物園が造られており、数多くの植物が植栽されていたことから、園芸教育の講義は行われていなかったものの、園芸教育の理念や目的は理解されていたのではないかと考えられる。そこで、本研究では樟蔭高等女学校の植物園の植物を調査することとした。

## 【研究方法】

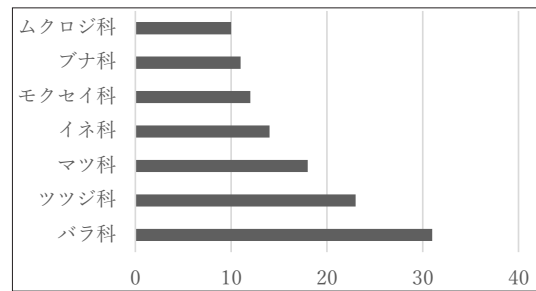
樟蔭高等女学校の設立当時、本館前にはあらゆる種類の草木が植えられ植物園としての役割をもった 1300 坪 (約 4300m<sup>2</sup>) の庭園が造られたと、『樟蔭学園 80 周年記念誌』(1997) に書かれている。そこで、本研究では当時の植物園の様子が描かれた「植物園分布図」から、どのような種類の草木が植えられていたのかを調査し、科名、花が咲く時期、常緑、落葉、高木、低木、多年草かどうか、食料になる実ができるか、実以外で染料や薬用になる部分があるかどうか、を分類別にする事とした。また、近代の園芸教科書を分析し、樟蔭高等女学校の植物園が園芸教育とどのように関係しているのかを考察した。

## 【結果と考察】

調査の結果、「植物園分布図」には 319 種類の植物名が書かれている。判読不能のものを除き、299 種類の植物について調査することができた。299 種類の植物の科名を分類すると、78 科となった。その中でも、最も多く植栽されている植物はバラ科であった<表 1>。

ウメやサクラもバラ科になるため、バラ科の植物が多く植栽されたと考えられる。さらに、常緑樹であるマツ科の植物を植えることで、花が咲いていない時期でも植物園の景色が寂しくならないように工夫したと思われる。また、植物園の 245 種類が花を咲かせる植物、うち 44 種類が食用となる実をつける植物であることがわかった。他にも、葉や樹皮が香料や染料に使われる植物などが植栽されていたことが明らかとなった。

表 1 植物園の植物科名



これは、『女子園藝教科書』や他の園芸教科書に記載されている栽培方法の例として挙げられている植物と多く似通っている。野菜・果実・花卉として、園芸の教科書と同じような植物を植栽することによって、(女学生が栽培する教育方法ではないが) 実践的な園芸教育を行う土壌はあつたと捉えることができよう。

また、季節ごとに咲く花々を見ることによって、美育の役割も果たしていたと考えられる。これは、これまで筆者が述べてきた高等女学校で行われた修身の「外見の美」と「内面の美」にもつながると考えることができる。修身では「内面の美」を磨くことで「外見の美」を磨くことができると説いている。このことから、樟蔭高等女学校の植物園は園芸教育だけでなく美育としての役割も担っていたと考えることができる。

さらに、当時の女学生向け雑誌には、園芸に関する記事も散見しており、高等女学校における園芸教育との関連性を見ることができる。このように、園芸教育および植物園の存在は高等女学校教育と大きく関わっており、今後も考察が必要である。